

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

③教育効果・成果についての検証と教育プログラムを改善するシステムの構築

●東京工業大学社会理工学研究科社会工学専攻

「実践・理論融合の国際的社会起業家養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

留学生と日本人学生の共同作業による社会起業ビジネスプラン作成と想定したが、日本人生の参加が得られなかった。初年度の経験を踏まえ、プログラム改善をすべきであったが、効果的な方法が見つからなかった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

大学院の留学生は社会経験を持っていることが多く、社会の現実への理解が深いのにに対し、日本人学生は社会経験がなく、かつ、現実問題へのコミットがほとんどない状況にある。共同作業をさせるには、日本人学生の社会課題への強い関心を持たせる教育が必要となる。かつ、英語力の問題もありこれは大学院に来てからでは遅く、学部において英語でのコミュニケーションが可能な能力を身につけておく必要がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

結果的に留学生のみによる社会起業ビジネスプラン発表となってしまったが、当初の想定を実施可能とするためには、学部における社会との接点の教育と語学教育のレベルアップが求められる。